

生物多様性保全の視点は(1)多様性の機能と(2)地域固有性です。現在は(1)の評価が中心的な話題にのぼりますが、実は(2)のほうが根源的で、将来を見据えた視点になると思います。侵入生物問題や遺伝子組み換え体の問題は(2)の視点がないと対処しようがありません。

国家戦略としては、目前の対策ばかりでなく、自然環境基礎調査のなかに侵入生物の拡大モニタリング、遺伝子組み換え生物拡散モニタリングを組みこむことが重要。また、その影響を把握するために、在来固有の生物の詳細な分布調査とその変化のモニタリングが必要になります。これまでのように、第3回調査、第4回調査と情報を付け加えて分布地図をつくるようなやり方は通用しなくなります。同じ方法で大規模な調査をくり返すことが重要です。基礎調査の予算が各県に数億円配分されるような規模でやれば上記の問題に使えるデータベースが構築できるのでは。

平成13年12月27日

椿 宣高(国立環境研究所・生物多様性プロジェクト)